

---

# 蟻と爪

金魚さん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

蟻と爪

### 【Nコード】

N6488C

### 【作者名】

金魚さん

### 【あらすじ】

僕さあ、最近悪夢を見てるんだ！とつても、気持ちが悪く夢。え？聞きたいの？止めときなよ。どうしても？実は僕が思い出したくないんだ。そこを何とか？…じゃあ君は、聞いても後悔しないね。うん。そうなんだよね。

## （前書き）

グロいつす。自分的には。よく寝る前にこんなものがかけたと、自分でも驚いています。そんぐらい、グロいです。ただただ、グロイ（と思います）です。

え？ああ、うん。そうなんだよ。  
最近、悪夢を見るんだ。

悪夢？悪趣味だなあ、人の悪夢を聞いたがるなんて。  
好奇心は大事だけどさ、行き過ぎた好奇心は身を滅ぼすよ。

その夢はね、虫に、食われるんだ。  
蛭や蛆なんかじゃないんだ。

蟻なんだよ。

蟻にね、一寸づつ、一寸づつ、本当に、気づかないぐらい、啄む様に、肉を毫り取られていくんだ。

けれど、その痛みは、うん、まるで何万本もの針を、一箇所に刺すようなんだ。

そんな痛みがね、体中で、何年も何十年も続くんだ。

延々と、蟻はむしり続けるんだ。体中のあちこつちで。

でもね、傷が治る速度と、蟻に毫られて肉が減っていく速度、あんまり変わらないんだ。

蟻はね、最初、体中を歩き回るんだ。

くすぐったいんだよ。さわさわと、羽でなでられるみたいで、でも、いきなり激痛に包まれるんだ。

蟻はね、関節は襲わないんだ。

落ちちゃったら、痛みが減るから。

まず、蟻は一匹だけくるんだ。

それでね、頭に卵を産み付けるんだよ。

するとあつという間に孵化してね、どうだろう十匹くらいかな、皮膚を破って飛び出てくるんだ。

痛くは無いんだ。ただ、ちょっとピリッとするだけ。

最初はね。

生まれた十匹もまた、卵を産むんだ。

前と同じ場所に、前と同じように、前より大きな卵を、前より深くけど、生まれてくる蟻は、ますます小さくなるんだ。

これをね、10回ぐらい繰り返すんだ。

その頃には、僕の全身を覆うぐらいに増えていてね。

痛みも、体中が悲鳴を上げて、地獄に逃げ込むんじゃないかっていうぐらい痛いんだ。

でも、蟻は止めてくれないんだ。

全身に、体中にだよ、散らばっていったね。

一呼吸置いてから、肉を喰いちぎり始めるんだ。

あ、そうそう、思い出したよ。

確かそれを、少しずつ僕の隣のスペースに置いていくんだ。

ちよつとづつ、ちよつとづつ。

イラつくぐらいゆつくりと。

するとね、だんだん人ができていくんだ。

僕から筆記取られた肉片で。

気味が悪いつたら無いよ。

皮膚で内臓ができてて、髪の毛が血管で、筋肉が髪の毛なんだ。

そして、髪の毛が骨で、内臓が皮膚なんだよ。

目玉や口は、ひっきりなしに体の表面を沼に浮かぶ枯葉のように動くんだ。

気持ち悪いよ。てらてら光る肉の海に、ヌペットした顔の一部が現れるんだ。

時々、筋肉になった骨に引っかかってね。

そうすると、ぶるぶると身を震わせるなまこのような指で、引つpegすんだ。

顔のパーツは体中を漂ってるっていったらう？

じゃあ、顔には何があると思う？

脳みそと蟻がね、互いにむさばりあってるんだ。頭では。

その表面には、絶えず、鱗のような、でも、ぶよぶよした、蟻と脳みそが透けて見える、肉色をした爪が絶えず生え続けてるんだ。

幾重にも重なって、てんでばらばら、一枚一枚が好き勝手な方向に向かつて。

互いに差し合ってね、時にはぱとりと落ちるんだよ。

爪がね。

そうすると、それはいつまでもピクピク、グニグニと動き続けて、僕のほうに向かつてくるんだ。

当然、僕は逃げられない。

顔まで這い上がってきた爪が、僕の食い散らかされた顔に食い込む！  
蟻に食い千切られるより、痛いことがあるなんて。

思いもしなかったよ。

必死で、爪を振り落とそうとしたんだ。

けど、食い込んだ爪は落ちない。

するとそれは僕の顔中に生え始めたんだ！

恐ろしいよ。おぞましいよ。いまだに爪を見ると震えが走る。

必死で、必死でもがいていると、隣の、なんと呼ぼうか、ぬらぬらとした肉の塊がこっちへ来る。

そしてね、あの、熱っぽいような、冷やっこいような、そんな手で僕の頬を撫ぜるんだ。

それから、じーっと僕の目を覗き込む。

爪がのたうつ顔で、爪に覆われつつある僕の顔を。

目を疑ったよ。

覗き込んでいたのは僕だったんだから。

正気を失ったかと思った。

…でも、でもさ！よく考えたらそれは当然だよね！

だってさ、あははははは、僕の体から毫り取られた肉片でできているんだから。

そいつは、僕に囁きかけるんだ。

何回も、何回もね。その内、蟻達も一緒に囁き始めるんだ。

僕が、その囁きに耳を傾けようとしたら、そこで、夢は終わって、目が覚めるんだ。

わかってるよ、そうだとも。

くだらないことさ、ただの夢だよ。

え？僕の頬にぶよぶよした桃色の蛆が付いてる？

気のせいだよ。

だって、たぶんそれは、爪だから。

昨日の夜ね、僕は彼から聞いたんだ。

ほら、僕の肉片からできた、彼だよ。

激痛に叫び身悶えながら。

彼は囁いた、人の幸せは人の不幸の上に成り立つて。

きつと、最初に蟻にあったときには理解できなかったと思う。でもね、昨日は理解できた。

思ったとおり、今朝、目が覚めても激痛は引かなかったよ。

ほったたに、グジュグジュと蠢く、爪が生えていたから。

この爪をね、君にあげるよ。

きつと、蟻達も爪と一緒に君の元に行くと思うな。

それも、夢じゃなく、現実でね。

彼らの望みはね、夢から外に出ることだったんだよ。

君も、気の毒だね。

知りたがりさえしなければ、僕も話さなかったのに。嘘じゃないよ。きっと、他の人に話をしたさ。途中で耳をふさいで逃げても良かったのに。

じゃあ、今晚はいい夢が見られるといいね。  
僕はきっと、見られるよ。

君、うれしいでしょ？だって、今まで僕しか味わったことのない苦痛と絶望を味わえるんだから。好奇心が満たされるだろう？

[illegible]

ほら、ほら、日も翳ってきた！

ほら、ほら、君の背中に一匹の蟻が！

ざわざわと、君の影がうごめいている！

[illegible]

人の幸せは不幸の上に



（後書き）

夢 悪夢 爪 爪の夢 蟻

他に考えてたタイトル。爪にしたら、手の続きっぽいから止めました。クオリティもガクッと下がってるから。こっちのが丁寧に書いたのに。やっぱり、思いつくまま場の雰囲気を書いたほうが、短編はできがいいのかも。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6488c/>

---

蟻と爪

2011年1月15日21時50分発行